

## 古筆学より見たる冷泉家所蔵本の意義（続）

著者	田中 登
雑誌名	國文學
巻	92
ページ	95-105
発行年	2008-03-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/1211">http://hdl.handle.net/10112/1211</a>

# 古筆学より見たる冷泉家所蔵本の意義（続）

田中 登

前稿（『古筆学より見たる冷泉家所蔵本の意義』（『古筆と和歌』平成十九年、笠間書院）では、巷間伝わる古筆切のルーツ

が冷泉家所蔵本であつたケースについて報告したが、本稿では、奥書や端作などから考えて、古筆見などによる単なる言い伝えなどではなく、当該人物の眞の筆跡とするに足る冷泉家の資料について報告してみることにした。

そうした資料は、世にあまた伝わる古筆切の筆者が、果たして正しいものかどうか、その判定基準となりうるもので、古筆研究にとって欠くべからざるものといえよう。俊成・定家など古筆の世界の大物はしばらく措くこととし、以下、主として鎌倉中期から室町初期あたりの人物を対象に、新撰古筆名葉集に登場する順に取り上げ検討してみることにした。

一 覚助法親王

覚助法親王は後嵯峨院の皇子で、建長二年（一二五〇）の生まれ。冷泉家には、続千載集撰進の折に詠まれた文保百首の自筆本一卷が伝わっており、これは時雨亭叢書第三十五卷『文保百首・宝治百首』（平成十五年、朝日新聞社）に収められている。一方、新撰古筆名葉集の覚助法親王の項には「四半 古今集」なる記述が見られ、これに該当すると思われる切が久曾昇氏『古筆切影印解説Ⅰ古今集編』（平成七年、風間書房）に収められているが、両者比較してみると、文保百首は覚助の晩年期的ものであるせいか線に力がなく、両者同筆とはいいがたない。古今集切の筆者覚助は伝称と受け止めておくべきであろう。

## 二 一条内径

一条内径は内実の男で、正応四年（一二九一）の生まれ。冷泉家には、やはり文保百首の自筆本一卷が伝わっているが、古筆切の中には、同じ文保百首を書写内容とする切がある。筆者を一条内径とする玄中切がそれで、新撰古筆名葉集の内径の項にも「玄中切 自詠百首懷紙歌二行書」と記されている。この玄中切は、藻塩草・翰墨城・見ぬ世の友など、著名な手鑑に見えており、架蔵の切を取めた拙著『統国文学十古筆切入門』（昭和六十四年、和泉書院）では、卷子本に大振りの字でゆったりと書かれていることから、確証はないものの、作者内径の自筆浄書本であろうと記した。しかしながら、冷泉家のそれと比較してみると、必ずしも両者同筆とはいいがたい面がある。いったい、これをどう解釈したらよいのであろうか。冷泉家本が作者の自筆であることは動かないであろうから、玄中切の方は、おそらく時の能書家によって書かれ献上された清書本とみるべきなのであろう。

## 三 一条兼良

一条兼良は経嗣の男で、応永九年（一四〇二）の生まれ。冷泉家には、一条兼良の述作になる伊勢物語愚見抄下がある。時雨亭叢書第四十一卷『伊勢物語・伊勢物語愚見抄』（平成十年）所収の該本の巻末には、文明六年（一四七四）十月の署名入り奥書があつて、紛れもなく兼良の自筆本であることを証している。上巻が伝存しないのは残念なことであるが、兼良の自筆の仮名資料がこれほどまとまって伝わっているのは、貴重なこととすべきであろう。兼良筆と伝える古筆切には、後撰集・新統古今集・歌林良材集・源氏物語の各四半切や藤川日記の巻物切などが伝存するが、冷泉家本に照らしていずれも兼良の真跡と認められる。とくに新統古今集や藤川日記の切は第一級の資料とすべきであろう。

## 四 西園寺実兼

西園寺実兼は公相の男で、建長元年（一二四九）の生まれ。冷泉家には、実兼（空性）の文保百首の自筆本一卷が伝わるが、

実兼筆と伝える古筆切に、藻塩草所収の野宮切がある。新撰古筆名葉集はこれを「自詠百首巻物」とするが、確証はない。両者筆跡を比べてみると、野宮切は忽卒の間に書したおほしく、比較は困難だ。ただし、拙著『国文学古筆切入門』（昭和六十年）や同じく拙著の『平成新修古筆資料集』第一集（平成十二年、思文閣出版）に収めた実兼集の巻物切などは、同筆とみてさしつかえないものと思われる。

## 五 小倉実教

小倉実教は公雄の男で、文永元年（一二六四）の生まれ。冷泉家には、実教の文保百首の自筆本一卷が伝わる。一方、新撰古筆名葉集の実教の項には、「四半 古今歌二行書」という記述があつて、これに該当すると思われる切を、『平成新修古筆資料集』第一集並びに第二集（平成十五年）に各一葉ずつ収めておいたが、両者の筆跡を比較してみると、どうも同筆とはいえない。古筆切の方は単なる伝称とみるべきであろう。

## 六 小倉実名

小倉実名は公脩の男で、正和四年（一一三五）の生まれ。冷泉家には、実名の永徳百首の自筆本一卷が残されており、時雨亭叢書第三十四巻『中世百首・七夕御会和歌懐紙』（平成八年）に収められている。この実名を伝称筆者とする古筆切は、新撰古筆名葉集を播いてみても、伊賀切古今集・四半切古今集・四半切新勅撰集・四半切玉葉集・四半切続後拾遺集と少々異なるが、翰墨城所収の伊賀切や『平成新修古筆資料集』第一集所収の四半切玉葉集、『平成新修古筆資料集』第三集（平成十八年）所収の四半切古今集などは、実名の真筆とみてもよさそうである。おそらくこれらはしかるべき奥書のある本を切つたのであろう。なお、実名には文和三年（一一三四）三月に書写した旨の自筆署名人の奥書を備えた古今集も伝わっており、先年これが『玉英堂稀覯本書目』第二百十三号（平成五年）に紹介されていたことを付記しておく。

## 七 三条実任

三条実任は公種の男で、文永元年（一二六四）の生まれ。冷泉家には、実任の文保百首の自筆本一卷と正中二年（一二三二）の七夕御会和歌懐紙（『中世百首・七夕御会和歌懐紙』所収）が伝わっている。一方、実任の古筆切については、淡路切古今集が新撰古筆名葉集にもその名が見えていてよく知られているが、今、翰墨城や『古筆切影印解説I古今集編』の淡路切と比較してみると、確かに両者同筆の趣がみてとれる。これまたしかるべき奥書のある本を切ったのであろう。

## 八 日野俊光

日野俊光は資宣の男で、文応元年（一二六〇）の生まれ。冷泉家には、俊光の文保百首の自筆本一卷が伝わるが、彼の名を冠する古筆切としては千種切がある。新撰古筆名葉集の俊光の項に「千種切 四半古今後拾遺歌二行書首書朱点アリナキモアリ」と記されているもので、拙著『続国文学古筆切入門』にも一葉紹介しておいた。両者比較してみると、紛れもなく同筆で

あり、千種切は俊光の真筆として扱ってよいことになる。

## 九 藤原光俊

藤原光俊は光親の男で、建仁三年（一一〇三）の生まれ。嘉禎二年（一二三六）出家して法名を真観と称した。冷泉家には、建長六年（一二五四）二月に書写した旨の真観の自筆署名入り奥書を備えた範永朝臣集が伝わっており、これが時雨亭叢書第六十三巻『平安私家集 十一』（平成十九年）に収められた。同書にはその範永朝臣集と同筆の為頼朝臣集や在良朝臣集も紹介されており、これで真観の真跡資料は一挙に豊富なものとなったが、今、これらを小松茂美氏の『古筆学大成19』私家集三（平成三年、講談社）所収の藤原光俊の為頼集切と比較してみると、両者はまさに同筆。しかのみならず該断簡は上記の為頼朝臣集から切り出されたものであると知られるのである。要するに、該断簡に付された古筆見の極札は正しかったことになるのである。

一〇 六条有忠

六条有忠は有房の男で、弘安四年（一二八二）の生まれ。冷泉家には、文保百首の自筆本一卷が伝わる。一方、有忠筆と称する古筆切では愛宕切朗詠集が有名で、翰墨城や『平成新修古筆資料集』第一・三集などに見えているが、両者を比較してみると同筆とはいいがたく、愛宕切の筆者有忠は単なる伝称にすぎないようである。

一一 平惟継

平惟継は高兼の男で、文永三年（一二六六）の生まれ。冷泉家には、元徳二年（一一三三）の七夕御会三首和歌が伝わっており、『中世百首・七夕御会和歌懐紙』に収められている。一方、平惟継の名を冠した古筆切としては、新撰古筆名葉集の惟継の項に「四半 新古今歌二行書」という記述があつて、これに該当すると思われるものが『古筆切影印解説Ⅲ新古今集編』（平成十一年）に見えている。比較してみると、必ずしも両者同筆とはいいがたい。切の方は単なる伝称の域を出るものではない。

さそうである。

一二 世尊寺行房

世尊寺行房は経尹の男で、生年未詳。冷泉家には、元徳二年の七夕御会和歌懐紙が伝わる。行房の古筆切としては下野切拾遺集が有名で、見ぬ世の友・藻塩草・翰墨城などに見えており、新撰古筆名葉集にも「六半拾遺歌二行書朱書入アリ」と記されている。今、これらを和歌懐紙と比較してみると、両者まさに同筆。江戸時代の古筆見の鑑定が正しかったことが証明されるのである。

一三 四辻善成

四辻善成は尊雅王の男で、嘉暦元年（一一三二）の生まれ。冷泉家には、元徳百首の自筆本一卷（『中世百首・七夕御会和歌懐紙』所収）が伝存するが、伝善成筆の古筆切に河海抄を書写した細川切がある。細川切については、新撰古筆名葉集にも「細川切 四半河海抄カナ交リ杉原紙虫喰アリ」と記され、見ぬ世の友・藻塩草にも見えているが、比較してみると、両者同

筆とも断じかねる。今しばらく別筆とみておくことにしたい。

#### 一四 今川了俊

今川了俊は範圍の男で、嘉曆元年（一一三二六）の生まれ。冷泉家には、了俊の書写になる撰集抄が伝存しており、時雨亭叢書第四十三卷『源家長日記・いはでしのぶ・撰集抄』（平成九年）に収められている。該本は四半形の袋綴本で、卷末には「此草子本、字不見分所々も有。／又落字歟と所存も有。只本のま、／書付了。少々以了簡、私に注たる事も有也。／後見の人々なをし付給べき歟／了俊（花押）」とあつて、書写年次は明らかでないものの、了俊の真筆であることは明白である。一方、了俊の古筆切としては、源氏物語を書写した伊予切が有名で、特に藻塩草の切は了俊の奥書部分を伝えており、これまた了俊の真筆紛れもないものと知られる。冷泉家の撰集抄の本文部分は漢字交じりの片仮名書きであり、了俊の片仮名資料として今後珍重されるべきものであろう。

#### 一五 藤原為家

藤原為家は定家の男で、建久九年（一一九八）の生まれ。冷泉家には、統後撰和歌集以下、為家の書写になるものが少なからず伝存している。その内、統後撰集は四半形綴葉装一帖で、時雨亭叢書第六卷『統後撰和歌集・為家歌学』に収められているが、該本の卷末には「建長七年五月十六日中風右筆懇終書写之功／特進前重相戸部尚書藤原（花押）」と奥書があつて、これが紛れもない為家の真筆であることを証している。世に為家筆と称する古筆切は数多いが、真筆と目すべきものはいたって少ない。今後は、冷泉家の統後撰集その他のものを基準にして筆跡判断を進めてゆく必要がある。なお、為家も俊成・定家同様に側近を駆つて旺盛な私家集書写活動を展開していたことがごく近年になって知られるに至つた。これについては時雨亭叢書第六十三卷『平安私家集 十一』（平成十九年）を参照されたい。

一六 二条為藤

二条為藤は為道の男で、建治元年（一二七五）の生まれ。冷泉家には、嘉元首首の自筆本一卷が伝わり、『中世百首・七夕御会和歌懷紙』に収められている。一方、為藤の名を冠する古筆切としては、藻塩草所収の肥前切新古今集が有名で、新撰古筆名葉集の為藤の項にも「肥前切 四半新古今歌二行書ウタノ頭二朱ニテ一二三ノ点アリ」と記述されている。今、両者を比較してみると、一部似た所もないわけではないが、同筆というところまでは断じがたい。

一七 二条為親

二条為親は為道の男で、生年未詳。冷泉家には、元徳元年の七夕三首和歌懷紙が伝わる。一方、為親筆と伝える古筆切としては、新撰古筆名葉集に「島田切 四半統千載歌二行書」と記されているものが有名である。この島田切は小松茂美氏の『古筆学大成II』新古今和歌集二ノ新葉集（平成三年）に十九葉もの図版が収められており、比較してみると確かに両者同筆と認

められる。したがって、その書写年代も当然のことながら、為親が没した暦応四年（一三四一）以前ということになり、元徳二年（一三二〇）の統千載集成立時にきわめて近い時点で書写された古筆切として珍重すべきものといえよう。

一八 二条為定

二条為定は為道の男で、正応二年（一二八九）の生まれ。冷泉家には、元徳二年の和歌懷紙が伝わるが、古筆切の伝称筆者としては、新撰古筆名葉集に十三種もの切が登録されるなど古来より親しまれている。この内、とりわけ著名なのが、藻塩草所収の冷泉切統後拾遺集と見ぬ世の友所収の世保切古今集で、今、この両古筆切を冷泉家の懷紙と比較してみると、冷泉切・世保切ともに懷紙とは異筆なものと知られる。

一九 二条為明

二条為明は為藤の男で、永仁三年（一二九五）の生まれ。冷泉家には、元徳二年の和歌懷紙が伝わっている。一方、為明の名を冠した古筆切としては、朝倉切がある。新撰古筆名葉集の



為明の項にも「朝倉切 続古今歌二行書文字二片カナ付アリ」と記されているものである。今、『古筆学大成11』新古今集二、新葉和歌集に収められている朝倉切と比較してみると、どうも両者同筆とはいいたいようである。

## 二〇 二条為重

二条為重は為冬の男で、永仁元年（一二九三）の生まれ。冷泉家には、百首愚草一卷が伝わり、時雨亭叢書第十卷『為家詠草集』（平成十二年）に収められている。この百首歌は従来「為家一夜百首」の名を冠して伝存、為家の作として扱われていたものだが、叢書の解題で佐藤恒雄氏の考証することく為重の作品である。冷泉家本には巻末に「文和二年九月五日書之羽林郎将（花押）」という奥書もあって、これが文和二年（一一三三）為重が左近衛権中将であった時の筆と知られる。さて、この為重を伝称筆者とする著名な古筆切に新古今集の道也切がある。新撰古筆名葉集の為重の項に「道也切 四半新古今歌二行書ウタノ首ニ一字名アリ雲紙或ハ白紙」と記されているもので、『古筆学大成11』新古今和歌集二、新葉和歌集にも図版として二十九葉の多きが収められている。今、これらの切と冷泉

家所蔵の百首歌とを比較してみると、筆跡は両者酷似しており、道也切は為重の真筆として扱ってもよいものと思われる。

## 二一 二条為遠

二条為遠は為定の男で、暦応四年（一三四一）の生まれ。冷泉家には、永徳百首の自筆本一卷が伝わる。一方、為遠の名を冠する古筆切としては八島切古今集が有名で、新撰古筆名葉集にも「八島切 四半古今集歌二行書」と記されている。今、見ぬ世の友や藻塩草所収の八島切と冷泉家の永徳百首とを比較してみると、残念ながら両者同筆とは認めがたい。八島切における為遠は単なる伝称とすべきであろう。

## 二二 二条為右

二条為右は為重の男で、生年未詳。冷泉家には、為右の書写になる新後拾遺和歌集が伝わり、時雨亭叢書第十三卷『中世勅撰集』（平成十四年）に収められている。該本は綴葉装四半本で、巻十一から二十までの後半部分にすぎず、それも途中かなりの脱落があるが、巻末には「至徳四年正月廿六日／以奏覧本

不改文字書写之／可令秘藏也／羽林郎將藤（花押）」とあって、至徳四年（一三八七）に為右の手によって書写されたものであることが知られる。さて、為右の名を冠する古筆切としては、豊前切新古今集が著名で、新撰古筆名葉集の為右の項の最初に「豊前切 新古今歌二行書泥画アルハ跡書ナリ」と記されている。今、藻塩草などに見られる豊前切と冷泉家の新後拾遺集とを比較してみると、筆跡は両者酷似しており、同筆の可能性がきわめて高い。『平成新修古筆資料集』第一集の解説では、「為右は単なる伝称に過ぎない」と述べたが、現在では訂正の必要があるかと考えている。なお、為右筆と伝える新後拾遺集の四半切が伝存するが、こちらは冷泉家所蔵本から切り出されたものゆえ、為右の真跡たること論を待たない。

### 二三 定為

定為は二条為氏の男で、生年未詳。冷泉家には、定為が書写した万葉集註釈が伝わり、時雨亭叢書第三十九卷『金沢文庫本万葉集卷第十八・中世万葉学』（平成六年）に収められている。該本は万葉集註釈の卷一と三の綴葉装四半本二帖から成るが、その内、卷一の巻末に「弘安八年夏之比、以玄覚律師本／書始

之処、件本依有指合事／閣筆畢、経年序更借請、同十一年正月廿七日終書功、押昏／注之所々即書入之、所謂私云／等也／定為（花押）／同年夏比一校了」とあり、該本が弘安十一年（一七八八）定為によって書写されたことが知られる。ただし、該本は漢字交じりの片仮名書きなので、平野切続千載集を始めとする伝定為筆の仮名の古筆切とは、残念ながら比較が困難である。

### 二四 冷泉為相

冷泉為相は為家の男で、弘長三年（一二六三）の生まれ。冷泉家には、文保百首の自筆本一卷が伝わっている。為相の名を冠する古筆切は数多く、新撰古筆名葉集にも相模切以下、都合二十一種もの切が登録されているが、たとえば、藻塩草に収められている相模切拾遺集の場合、文保百首と比較してみると明らかに異筆で、為相というのは単なる伝称の域を出るものではないことが知られよう。

## 二五 冷泉為秀

冷泉為秀は為相の男で、生年未詳。冷泉家には、為秀が書写した詠歌一体があつて『続後撰和歌集・為家歌学』に収められている。該本は綴葉装四半本で、巻末には「此一帖以祖父入道大納言為家卿／自筆本令書写校合訖尤／可為証本矣／右近権中将為秀（花押）」とあつて、これが確かに為秀の書写したものと知られるのである。一方、為秀筆とする古筆切は数多く、新撰古筆名葉集にも十二種もの切が登録されている。が、この内、たとえば、藻塩草に見える三好切続古今集など、冷泉家の詠歌一体と比較してみると、必ずしも同筆とはいえず、やはり伝称筆者の域に留まるようである。なお、為秀の真跡資料は、冷泉家以外にも少なからず伝存していることを付言しておく。

## 二六 冷泉為尹

冷泉為尹は為秀の男で、康安元年（一三六一）の生まれ。冷泉家には、永徳百首の自筆本一卷が伝わっている。為尹を伝称筆者とする古筆切に、四半切の定家家隆両卿撰歌合があり、そ

の筆跡はかなり似ているが、切の分量が少なすぎて、いまだ両者同筆とまでは断定できないでいる。

## 二七 津守国冬

津守国冬は国助の男で、文永七年（一二七〇）の生まれ。冷泉家には、文保百首の自筆本一卷が伝わる。この国冬を伝称筆者とする古筆切に伊勢切がある。新撰古筆名葉集の国冬の項の筆頭に「伊勢切 四半統拾遺歌二行書キラ画アリ」と記すもので、今、藻塩草に収められている伊勢切と文保百首とを比較してみると、明らかに異筆と知られる。

## おわりに

以上、近年冷泉家時雨亭文庫の調査が進み、様々な典籍が影印本という形で公開されるにつれて、幾多の真跡資料の存在が知られるようになってきた。その結果、これまで古筆切の伝称筆者として一顧だにされずにきた、当該切の筆者についても、果たして真筆か否か、これらの真跡資料と比較検討してみることも可能となってきたわけである。こうした作業は古筆学にとつ

て今後欠かすことのできない必須の手続きといえよう。

私の乏しい経験でいえば、古筆切についての筆者は、鎌倉中期以降、南北朝・室町と時代が下がるにつれて、単なる伝称ではなく、真跡である確立が高くなってゆくように思われるが、今後、こうした検証を推し進めてゆくためにも、冷泉家所蔵の典籍類に常に注意を払ってゆく必要があるう。

(たなか のぼる／本学教授)